

司馬遼太郎のトルストイ観

——『坂の上の雲』と『戦争と平和』をめぐって——

高橋 誠一郎

はじめに

司馬遼太郎（一九三三—一九六六年）は明治百周年にあたる一九六八年から、「四年と三カ月」をかけて日露戦争を主題とした『坂の上の雲』を執筆した。彼の歴史観をめぐっては、生前から論争が起きていたが、日露戦争開戦百周年を迎えた今日、再び『坂の上の雲』を「明治国家」を賛美した小説として捉えようとする論調の特集が出てきている。

たしかに、『坂の上の雲』の前半で司馬遼太郎は日露戦争を『野蛮な帝国』との「祖国防衛戦争」と位置づけていた。しかし、旅順の攻防戦をセヴァストポリの激戦と比較するなかで、司馬の戦争観は大きく揺らぎ始める。そして、この長編小説を書き終えた後で司馬は、日露戦争当時の「ロシア帝国は相手の日本帝国

に対して無知であった」と分析した後で、「世界史のなかですくなくとももう一例、帝政末期のロシアとそっくりの愚鈍さを示した国家がある」とし、それは「太平洋戦争をやった日本である」と記して、近代化の過程で「欧化と国粹」のサイクルに揺れたロシアと日本の類似性を鋭く指摘するようになるのである。⁽¹⁾

本稿においてはことに司馬遼太郎と徳富蘆花観に注目しながら、『坂の上の雲』の作風の変化を分析することによって、トルストイの『戦争と平和』との内面的なつながりとその意味を明らかにしたい。⁽²⁾

一 『坂の上の雲』前半のロシア帝国観と

「明治国家」観

長編小説『坂の上の雲』では圧倒的な量において戦争の描写や

作戦の分析がなされているが、注目したいのはここでは戦争だけでなく教育制度についての考察も重要な位置を占めていることである。

たとえば、司馬は民衆には将校になる可能性がほとんどなかったロシアの場合と比較しながら、「日本ではいかなる階層でも、一定の学校試験にさえ合格できれば平等に将校になれる道がひらかれている」明治の新しい教育制度のよさに注意を向けている。³ 実際、秋山兄弟はそのような教育制度の中で士官学校や海軍兵学校を卒業して、仕官として日露戦争に参加することになるのである。

さらに注目したいのは、『坂の上の雲』の前半では初期の自由民権運動における福沢諭吉の重要性とともに、松山中学における正岡子規と自由民権運動の係わりがかなり詳しく描かれていることである。福沢諭吉が「三田に『演説館』をつくり」、「そこで学生に稽古」をさせたことを紹介した司馬は、「福沢が考える文明とは、自由と権利、そして演説だったのでしょ」と記している。

正岡子規が学んだ松山中学はそのような福沢諭吉の理念とも深く結びついていた。司馬は土佐出身の権令・岩村高俊が松山でも自由民権運動を奨励したことを指摘するとともに、彼が「草間時福という慶應義塾出身の青年」を松山中学校の前身である「英学所」の校長としたことに注意を向けている。そして、司馬は「明治十四、五年ごろになると松山市内に青年演説グループがいくつ

もできた」が、「一人でその三グループの会員になるというほどに熱心」だった子規が、「自由とはなんぞやといった演題で」、市内のいくつもの会場を演説したと書き、植木枝盛が松山にきたときには「なかまと一緒に旅館におしかけ、意見をきいた」と続けたのである（Ⅰ・「真之」）。

それゆえ司馬遼太郎は「明治憲法」を、「下からの盛りあがり」が、太政官政権を土俵ぎわまで押しつけてできあがったものといふべき」と高く評価したのである。⁴

こうして、『坂の上の雲』を書き始めたころ司馬遼太郎は、明治維新によって「はじめて近代的な『国家』を持ち、さらにアジアで初めて『憲法』も持った『文明』的な『明治国家』と、皇帝の専制国家である『野蛮なロシア帝国』との戦いを正面から描こうとしていたといえよう。

二 『坂の上の雲』と徳富蘆花の『トルストイ』

司馬は「スラヴ人という民族は、本来、侵略的ではない」と断りつつも、ロシアによる対馬の占拠について、「こういう強盗式の侵略方法が、ロシアのやりかたである」（Ⅱ・「列強」と書き、さらに日露戦争を「世界的な帝国主義時代の一現象である」としながらも、「日本側の立場は、追いつめられた者が生きる力のぎりぎりのものをふりしぼろうとした防衛戦であった」（Ⅲ・「開

戦へ」と規定した。

さらに、第五巻ではロシア側が都市を要塞化して守っていた旅順攻防の悲惨な戦いを描く中でクリミア戦争に言及し、ペリーが日本に来航した一八五三年におきたこの戦争と日露戦争の「本質は酷似している」とし、ともに「ロシアの南下膨張政策から起こった」のであり、「英国がその植民地政策上、トルコに味方したことも、日露戦争に似ている」とした（『V・水師營』）。

ただ、興味深いのは司馬がここでセヴァストポリの攻防戦に「下級将校として従軍」し、籠城の陣地で小説『セヴァストポリ』を書いたトルストイが、「愛国と英雄的行動についての感動をあふれさせつつも、戦争というこの殺戮だけに価値を置く人類の巨大な衝動について痛酷なまでのろい声をあげている」ことに注意を向けていたことである。

司馬のこのような記述は、クリミア戦争の際に従軍していたトルストイにふれて、徳富蘆花がこの『セヴァストポリの記』三篇は、「作者自ら砲兵士官としてセヴァストポリの山手の一砲台を受け持つて居る所謂砲烟彈雨の間に書いたもの」であることと強調し、この傑作に見うる軍事の記叙は一風変わって、著しい面目を備えて居るが、此は前後五年間軍籍に居た賜物であろう」と説明していた明治三〇年の文章を想起させる。

実際、司馬は「少年のころ、最初に読んだ小説は徳富蘆花の『寄生木』だった」と認めているが、この作品では日露戦争に参

戦した若手将校の主人公が、トルストイへの関心を深めて、「人道のため平和の唱道者」となりたいという理想を持つにいたる過程が描かれているのである。

「蘆花とその全作品への私の心情は絵画でいえば暖色でいろどられて」（傍線引用者）いるとも司馬が記していたことを考えれば、彼が徳富蘆花の『セヴァストポリ』論だけでなく、『戦争と平和』論をも知っていたことは確かだろう。

評伝『トルストイ』において蘆花は「戦争と平和」を、ナポレオンのロシア侵攻前後の「露国社会の大パノラマ」であり、「花やかな人形の斬合や、小供役者の真似芝居でなくて、活人間の動く活社会が歴々と浮み出る」と書いた。そして、「其頃はナポレオン戦争もさほど遠いことではなく、云わば今日の史家が幕末の歴史を書く様なもので」、「此小説を書くために翁が蒐集した材料は実に莫大なものである」と続けていたのである。

このように見てくるとき、膨大な資料にあたりながら「祖国防衛戦争」としての日露戦争を描こうとしたとき、司馬遼太郎の視野にはナポレオンとの戦いを描いたトルストイの『戦争と平和』が強く意識されていたと思われる。なぜならば、日露戦争の勝利は日本人に民族意識の昂揚をもたらししたが、トルストイが大作『戦争と平和』において描いたのも、「祖国戦争」と呼ばれるロシア人の民族意識の昂揚を呼び起こした戦いだったのである。

実際、「戦争と平和」と『坂の上の雲』における主人公と作品

の構成には多くの類似点が見つかるのである。たとえば、長編歴史小説『戦争と平和』においてトルストイは、軍人アンドレイだけでなく、後に捕虜となる地主のピエールや貴族の娘ナターシャの三人を主人公とすることで戦争を様々な視点から全体的に描くことに成功した。さらに、トルストイはこの長編小説のクライマックスをナポレオンによるロシアへの侵入とモスクワの占領という未曾有の危機を迎えた一八一二年に設定しながらも、一八〇五年のアウステルリッツの戦いから、一八二〇年のエピソードまでの長い期間における主人公たちの苦悩や成長を丹念に描いていた。

一方、司馬遼太郎は地方都市松山における三人の若者たちを主人公としつつ、彼らの生活を通して、市民、陸軍、海軍という視点から戦争を描こうとしていた。そして司馬遼太郎も『坂の上の雲』のクライマックスを日露戦争に設定しつつも、それ以前の正岡子規の歩みや日清戦争（一八九四―一九五五年）、さらに秋山真之が観察した米西戦争（一八九八年）にも言及している。そして、エピソードともいえる「雨の坂」では主人公たちのその後にも触れているのである。

ではなぜ、司馬は『坂の上の雲』の前半ではトルストイへの言及がほとんどないのだろうか。このことを考える上で参考になると思われるのが日露戦争に際してトルストイの反戦論が幸徳秋水の翻訳で一九〇四年八月の『平民新聞』に「悔い改めよ」と題し

て掲載されたときの徳富蘆花の反応である。

ここでトルストイは「戦争は又もや起これり、何人にも無用無益なる疾苦此に再びし、^{つづき}譎詐此に再びし、而して人類一般の愚妄残忍亦茲に再びす……中略……人は其夢なるを信じて速かに醒め来らんことを希ふ」と記して、殺生を禁じている仏教国と「四海兄弟と愛を公言している」キリスト教国との間の戦争を、厳しく批判していた。

しかし、蘆花はこのようなトルストイの呼びかけにもかかわらず、「人道主義と愛国感情の板挟みに」なつて、「乗り出した船である。亡びても勝たねばならぬ。勝つまでは開かねばならぬ」と感じたのである。日露戦争に至る過程を「ロシアの態度には、弁護すべきところがまったくない。ロシアは日本を意識的に死へ追いつめていた。日本を窮鼠にした」(Ⅲ・開戦へ)と書いた司馬にも蘆花と同様に、「追いつめられた」小国日本の窮状への理解を欠いたと思われるトルストイの記述への反撥があったといえよう。

実際、トルストイは『戦争と平和』においてロシア人の勇敢な戦いを描きつつも、フランスとロシアとの戦争を「人間の理性と人間のすべての本性に反する事件」とよび、「数百万の人々がたがいに、「略奪、放火、虐殺」などの、「犯罪を犯し合い」ながらも、「それを犯罪とは思わなかつた」と厳しく批判をしていたのである。しかも、徳富蘆花が鋭く指摘したようにトルストイは

当初、『十二月党』を題目として一篇の大小説を、「書く積りであった」が、その「主人公の過去の生涯を知る必要があって、段々溯って終にナポレオン戦争の当時に到り」、そのころの「風俗、習慣、家庭、社会、宮廷の有様から戦争の事実まで遍く探求して、其結果を書いた」のが『戦争と平和』だったのである。

それゆえ、『坂の上の雲』を書き始めたころ司馬遼太郎は『戦争と平和』の構成や主人公の選び方を参考としつつも、トルストイの反戦論を、「侵略だけが国家の欲望であった」一九世紀末の激しい現実にはあわない理想論だと捉えていたように思える。

三 終章「雨の坂」と日露戦争後の

徳富蘆花についての考察

しかし、「日本人にとってきわめて不幸な事件」となった堅固な要塞である旅順攻撃の惨劇を、「戦いの惨烈さは、近代戦のそれを十分に予想させる」セヴァストーポリの攻防戦と比較しながら描く中で、しだいに司馬遼太郎はクリミア戦争を戦ったロシアと、日露戦争を戦った日本の類似性にも気づくようになる。

この意味で注目したいのは、「あとがき五」において司馬が、日露戦争をつうじて近代戦争の悲惨さを実感した後でトルストイへの敬愛の念を深めた徳富蘆花が、一九〇六年に彼の住むヤースナヤ・ポリャーナを訪ねていることによつて勝手の喜びを感じた

はずのナポレオンがほどなくして没落したことにふれて、日本の独立がもし「十何師団の陸軍と幾十万噸の海軍と云々の同盟によつて維持せらるる」ならば、それは「実に恐ろなる独立」であると批判し、言葉をついで「一步を誤れば、爾が戦勝は即ち亡國の始とならん、而して世界未曾有の人類の大戦乱の原とならん」と強い危機感を表明していたのである¹²。

一方、『坂の上の雲』の初期において、日露戦争が始まったときになされたトルストイの「非戦論」には全く触れていなかった司馬も、この長編小説の終章「雨の坂」においては、バルチック艦隊をうち破った後に参謀の秋山真之が、「人類や国家の本質を考えたり、生死についての宗教的命題」を考え続けたとし、「蘆花の憂鬱が真之を襲うのもこの時期である」と書いたのである。

さらに司馬は、日露戦争後の明治四四年に幸徳秋水たち二六名の社会主義者が天皇の暗殺を謀ったとして大逆罪で捕らえられて非公開裁判で一二名が死刑とされた際に徳富蘆花が第一高等学校において行った『「謀叛論」の講演』にも注意を払っている。

興味深いのは、蘆花の講演の内容が『戦争と平和』に描かれたロシアのデカブリストたちへの理解の上に成立していると思われることである。すなわち、トルストイは『戦争と平和』のエピローグにおいて主人公の一人であるビエールと「十二月党の乱」との結びつきも示唆していた。蘆花もここで「明治初年の日本」には「自由平等革新の空氣」がみちみちていたが、「新思想を導い

「蘭学者」や「勤王攘夷の志士」は、「時の権力から云へば謀叛人」だったとし、「国家百年の大計から云へば」、「十二名の無政府主義者を殺して将来永く無数の無政府主義者を生むべき種子を播いて了ふた」と糾弾したのだった。⁽¹³⁾

こうして司馬遼太郎もまた日露戦争を詳しく調べながら『坂の上の雲』を書く中で、秋山真之や徳富蘆花の「憂鬱」を肌で感じようになる。蘆花の国家観を説明した次のような文章は、司馬遼太郎自身の日露戦争観にも深く関わっていると思われる。「日露戦争そのものは国民の心情においてはたしかに祖国防衛戦争であった」が、「近代化のために江戸国家よりもはるかに国民一人々々にとって重い国家をつくらざるをえなかった」明治国家が、「国民に対する検察機関になっていくこと」を蘆花は嫌悪した（Ⅷ・あとがき五）。

この意味で注目したいのは、戦後に「海軍をやめて出家しようとし、そのことを部内のひとびとからとめられ」た秋山真之が、僧になることを自分の長男の大に託すようになったとし、彼を無宗派の僧にしたことにも簡単にふれていることである。『坂の上の雲』を書き終えた翌年から、『空海の風景』（一九七三―七五年）が書かれていることに着目するならば、ここで仏教のことが出てくることの意味は重し。⁽¹⁴⁾

なぜならば、司馬遼太郎は一九六五年の会談で、「明治後期では清沢満之の存在が大きい」とし、「政治的な働きかけでは皆無

ですけれども、思想家としては大きい」と主張し、その時に書いた論文では、「清沢の思想が、西洋哲学から最初に独立したあたらしい原理と体系を確立した西田幾多郎の思索に影響をあたえたという説が多い」として、西谷啓治や吉田久一の研究に言及していたのである。⁽¹⁵⁾

柳富子は清沢満之の意義にふれた吉田久一の『日本近代仏教史研究』によりながら、トルストイからの強い刺激もあり、日露戦争後は日本の知識層が、「自己の内面の問題として求道の傾向」とりはじめたとして⁽¹⁶⁾、つまり、先の論文では清沢などの仏教の改革運動と日露戦争後の状況にほとんど触れられていなかったが、多くの戦死者を生み出した日露戦争を描いた『坂の上の雲』を書き終えたとき、司馬もまた「人類や国家の本質を考えたり、生死についての宗教的命題」をも考えるようになっていたといえよう。

(1) 司馬遼太郎『歴史の中の日本』中公文庫、一九七六年、九九―一〇〇頁。

(2) 比較文明的な視点からの『坂の上の雲』の考察は、高橋誠一郎『この国のあした―司馬遼太郎の戦争観』のべる出版企画、二〇〇二年、第二章参照。

(3) 司馬遼太郎『坂の上の雲』第一巻、文春文庫、一九七八年、一八六頁。以下、『坂の上の雲』からの引用箇所は本文中にローマ数字で示した巻数と章の題名を記す。

- (4) 司馬遼太郎『司馬遼太郎が語る日本』第三巻、朝日新聞社、一九七七年、一三六頁。
- (5) 司馬遼太郎『明治』という国家 下巻、NHK出版、一九九〇年、一七二頁。
- (6) 徳富蘆花『トルストイ』(『徳富蘆花集』第一巻) 日本図書センター、一九九九年、七八頁。
- (7) 徳富蘆花『寄生木』(『蘆花全集』第八巻) 蘆花全集刊行会、一九九九年、七〇四頁。
- (8) 徳富蘆花、前掲書(『トルストイ』、九四―九五頁)。
- (9) 幸徳秋水『トルストイ翁の日露戦争論』『幸徳秋水全集』第五巻、明治文献資料刊行会、一九八二年。
- (10) 阿部軍治『徳富蘆花とトルストイ——日露文学交流の足跡』、彩流社、一九八九年、一一三―一四頁。
- (11) トルストイ著・工藤精一郎訳『戦争と平和』第三巻、新潮文庫、一九七二年、七頁。
- (12) 徳富蘆花『明治文学全集』第四二巻、筑摩書房、一九六六年、三六七頁。
- (13) 同右、三六九―七二頁。
- (14) 司馬遼太郎の仏教観の深まりについては、小林竜雄『司馬遼太郎考——モラル的緊張へ』中央公論新社、二〇〇二年、二二―六〇頁参照。
- (15) 司馬遼太郎『清沢満之と明治の知識人』司馬遼太郎 歴史叢談『中央公論社、二〇〇〇年、三八―頁、四〇―頁。
- (16) 柳富子『トルストイと日本』、早稲田大学出版会、一九九八年、一〇三―一四頁。

(たかはし・せいいちろう、比較文明学・

比較文学、東海大学教授)